

テーマ：「自然体験活動の企画と運営にあたって」

提出日 2010年4月16日 提出者 木村道紘

一言に自然体験活動と言っても、世の中には実にさまざまな自然体験活動が存在している。登山や自然観察会の他、環境教育プログラム、歴史伝統文化の訪問エコツアーなどは当会の得意とするところであるが、CONEの活動種目一覧の中には、流木アート、野外料理、畜産体験というものも挙げられている。「自然体験」という言葉から、ここでの「自然」の定義は、残念ながら日本人の根底にある、副詞あるいは動詞として認識している「自然」＝“自ずから然り”ではなく、対象の“もの”として捉える近代西歐的な nature ということである。

このように自然体験活動を“商品”として捉えた場合、マーケティングの動向や調査結果を元に商品開発を行う…という、各企業が一般的に行っているプロセスが適応されることになる。そしてそれは、ある程度の集客販売がなされ、傍目には成功しているように見える。実際、近県のとあるエコツアー団体では、平均年齢35.5歳、年収平均が400万円に達するというところもある。

しかし、自然体験は“もの”のように取り扱うことはできない。大量に仕入れて在庫を抱え、時期を見て一斉に売りさばくことができないのは言うまでもないが、それ以上に問題なのが、同じ商品でも、体験指導をするリーダーやインストラクターによって、実施内容も参加者が持ち帰るものも全く違うものになり得るということである。このように考えると、先述したエコツアー団体の体験指導者は突出した技術を有していると言える。現に採用基準はかなり高く、体験プログラムでは指導者が各個人の長所を生かしたインタープリテーションを行い、参加者の満足度もかなり高い。

さてそれでは、私たちの会に目を向けてみる。会員数は2010年4月16日現在146名、平均年齢は52.3歳、どうも様子が違うようである。それもそのはず、当会では地域社会において、定年退職者がセカンドライフを自然を満喫しながら有意義に過ごすという位置づけをすでにしているのである。しかし、近年は働き盛りの若い世代も、エコ精神に実益が伴う持続可能な社会実現の可能性を求めて積極的に入会している状況にあり、平均年齢はむしろ下がってきている傾向にある。また、入会資格に自然体験活動指導者としてのスキルを要求していないため、業界的には職業として成立するはずのインタープリターという名称も、会員になるだけで名乗ってしまう危険なシステムとなっている。ところが中には全国的なシンポジウムでパネリスト等として活動している堂々たるインタープリターもおり、初心者からプロまで、実にさまざまな人材を有している。

このような背景を元に、私なりの自然体験活動の企画と運営についての考えを述べる。

まず、一般の方を自然体験活動に誘うにあたっての企画では、できるだけ参加要件のハードルは低く設定したい。自然体験活動の指導者として活動していくと、ある時期、「このような崇高な自然体験の世界は、誰でもと言うわけではなく、ある一定のレベルに達しないと踏み込ませてはいけけないのではないか」という感覚に見舞われることがある。そのような感覚は、どちらかという自然保護活動などを長らく無償で行ってきて、「自然体験活動は辛く悲しいものであり、認められなく報われない状況の中で信念を貫き通す、至上の美德である」と考えているような人に多い。しかしこのような考えは大きな間違いであり、特に若者や最近になって自然体験活動をし始めた者にとっては迷惑この上ない。車の排気ガスを出さないようにするのは当たり前、森林破壊がどれだけ地球温暖化に

悪影響を与えているかなどは常識の中で育ってきている。朝起きてインターネットに接続すると Yahoo、msn などのポータルサイトでは、環境問題や自然保護に関するニュースが必ず一つ以上トップページに露出している。もはや自然保護が自分の生活とかけ離れた別世界のものと認識している人はほとんどいなく、自分のライフスタイルは地球が健全にあり続ける歩みと同調しているはずであると思っている人の方が多いのである。彼らにとっては森の中で歌を歌うことも立派な自然体験活動の一つである。自然体験活動も自然保護活動も辛く悲しいものではなく、明るく楽しいものなの当たり前時代のだから、深く地球を思案するような思い入れや志を持たずとも、気軽に参加できるように設定したい。このようなことは、指導者資格においても同じことが言える。報われなかった過去にこだわり引きずってしまっているインストラクターよりも、屈託なく天真爛漫に自然を伝えることができるインストラクターの方が、参加者の心をはるかに揺さぶることができるのである。だから私は、資格認定講座の受講資格に高すぎるハードルを設定するのは、どうかと思っているのだ。

話を戻そう。次に、当会で最もガイドの需要が高い登山について考えてみる。重装備をしなくては登ることができない登山は、先述のような“いつ、どこでも自然とシンクロできる”ようなことを伝えるのは難しい。かえって“自然の聖地”に行かないと、本物の自然体験はできない…という印象を与えてしまいがちだ。だが困難を克服してこそ達成できるという、「生きる力」を育むには適したプログラムではある。私は、初心者には登山プログラムではなく、自然観察または森林セラピー的なプログラムの方が適しているのではないかと思う。重装備は自分の心身にバリアーを張らせてしまい、自分の外側にある自然世界とシンクロしにくいし、何より重装備でないと到達できない山頂に行くという事は、人間本来の力以上のことを、自然の摂理に逆らってまで無理やり行っているという風にも受け取れるのである。私は、そんな大げさなことはしなくても十分に自然を楽しみ、味わうことができると考えている。もちろん私も、雄大な景色や樹木、花などを見にたびたび登山に出かける。しかし時に、自分の身を包んでいる重装備に、自然と自分との距離を感じて寂しくなってしまうことがあるのだ。そしてこの感覚は、これから自然体験をはじめようと考えている人の多くが抱いている可能性があり、それは自然体験プログラムの現場で参加者に顕著に現れている。参加要綱に「野外活動に適した服装」と明記したぐらいでは、綿製薄着の服装やサンダル履きで参加してくることは普通である。ところが参加者の中には自然＝“自ずから然り”の感覚のままに軽装で参加したのであって、自分の身の丈以上のハードな体験は求めていない人もいるだろう。それはそれで大いに結構なことであって、一対一であれば辛くなったら途中でやめていただくこともできるのだが、他に参加者がいるのでそうもいかない、丁寧にお断りしなくてはならなくなる。

ここまでのことを要約すると、次のようになる。

- ① 自然体験活動の企画は、なるべく誰でも参加できるような内容になるように留意する。
- ② 参加要件に設けるハードルは、その理由が安全対策のためということが前提である。精神面でのハードルは必要ない。
- ③ 登山プログラムは「生きる力」を育てるのには適しているが、重装備は「自然とシンクロする」のには適していない。

また、プログラムの内容については、各指導者の個性を、できる限り長所として生かせるような内容にしたい。多様な生物と環境との相互作用による複雑な因果関係を持つ自然生態系の中で、複数の指導者が金太郎飴のようにみな同じ指導の仕方をするのはナンセンスである。担当してもらった指導者と打ち合わせる際に、その指導者が持つ個性の深い部分を理解するように努め、実施フィールドの持つポテンシャルの範囲で、個性が最大限に発揮されるようにプログラムを組んでいく。もちろん、そうして企画したパーソナル・プログラムは大人数を一斉に案内するような、例えば修学旅行の学生を案内するには適していない。大人数を複数で指導する際には、個性は逆に仇となる場合もある。

しかし、ここで注意したいのは、あまりにも精度の高い、完璧なプログラムにはしない方が良いということである。例えば、年に一回だけ、その事業のために全身全霊をかけて自然体験イベントを実施する場合、参加者に大きな

感動を与え、また深い共感を得られる場合がある。しかし、そのような大きな成功を収めるような事業は、継続して毎日実施できるだろうか？例えばストレスの調査票として、社会再適応評価尺度と呼ばれる、過去のライフイベントをチェックする票がある。この票はアメリカで、5,000人の精神的不調の患者からその原因となったストレスを統計処理してランクづけしたものである。合計点数が年間200～299点なら50%、300点以上になると80%の人に何らかの疾患が発生していた。

参加者と主催者側の意識がシンクロし、感動に包まれる中、自然体験イベントが成功に終わる。これを「自分の輝かしい成功」とした場合、ストレス値は28ポイントと数えることができる。他のライフイベントのストレス値を見ていくと、配偶者の死100、離婚73、結婚50、失業47、上司とのトラブル23となっている。ライフイベントの多さは、精神疾患の発生を予測する手助けになる。上司とのトラブルよりもストレス値の高いものを、毎日継続して実施してしまっているのは、心身が疲れ果ててバランスが崩れ、挙句の果てにさまざまな疾患をも生じてしまうことだろう。

イベント終了後も、交感神経が高まり興奮して夜寝られずに、翌日のイベントに支障をきたすようであれば、指導者は翌日は休暇を取るか、もしくは新たなストレスコーピング（ストレスへの対処法）を身につける必要がある。また、単純に休暇と書いたが、イベントでの疲労を癒すために休暇をとる場合は、当然、それに見合うだけの報酬を得るために、事業の収益性を上げなくてはならないし、さらに準備に数日間かかる場合はその分の手当ても必要となるであろう。つまり、良い企画を作るには越したことはないが、自らのホメオスターシス（恒常性）を維持できなくなるほどの完璧かつ狡猾な企画はやめるべきである。

この章の内容を要約すると、

- ④ プログラム内容は、担当する指導者の個性が十分に発揮されるように留意する。
- ⑤ プログラム内容の狡猾さ・精度は、指導者が持つ能力の70%程度に抑える。
- ⑥ 指導者への報酬は、当日の働きだけではなく、それに関わる前後の働きを考慮したものにする。

最後に、運営にあたっては、地域連携を大切にしていきたい。私はこの地に来て15年が経過した。生まれ育った土地ではないが、この地はもう私の郷土である。私のインタープリテーション理論では、地域をよくよく訪ね歩き、地域の生の声を集め、それらの体験を自分の中で繰り返し反復させることによって、地域の声を自分のものとするのが大切だと考えている。そうすることでバックボーンの厚い、説得力のあるインタープリテーションが可能となる。そして「私も地元民として解説できた」という自信が、さらに指導者を郷土愛へと導くことになる。

私たちはこの移行講座で、インタープリター・コーディネーターになる。インタープリター・コーディネーターとは、“さまざまな野外フィールドを使ったインタープリテーション活動の企画・運営ができ、リーダーやインストラクターの活躍する場を創出する。”ということであるが、それを地域で実現させるためには、私一人で頑張っても、もしくは会場だけが頑張っても達成することは不可能である。地域には自然と人との関係が蓄積された古い歴史と生の営みがあり、また地域を守ってきた、人々が拠りにしている神もいよう。そんなほのぼのとしたやさしい風が流れている地域に、いくらシステムとして優れているからといっても、デジタルなものや斬新なものは、そう必要とはされていない。グローバルスタンダードの名の下に蹂躪されてしまうことへの恐れの方が強いであろう。

しかも残念ながら当地ではまだ、インタープリターが職業として成り立っていけないという住民認識はなく、そういう活動をしていると話すと、心配そうな顔をされてしまう。そこで私たちはもう一つ、エコツアープロデューサーとしての顔を持ち、力を発揮すべきだと考えている。

エコツアープロデューサーは、地域のエコツアーにおける全体統括と商業的責任を持つ存在である。全体統括とは行政、旅行者、ガイド、旅行業者、宿泊施設、飲食施設、お土産屋、二次交通、一次産業、観光資源、マスコミ、研究者、地元住民等全ての結びつきや事業運営の流れの全体統括であり、エコツアーにおける商業的責任とは地域資源の保護、地域経済活性化、観光振興などが挙げられる。これら全てを活性化させることができる虫のいい事業はほとんどないのだが、エコツアープロデューサーとしての心構えとスタンスをもって、地域の人と人、関係機関同

士が繋がり関係を深めていく手助けをし、地域に商業的あるいは経済的な潤いをもたらすような貢献をしていかなないと、新参者である私たちの活動は受け入れられにくい。地域に受け入れられる最善の方法とは、エコツアープロデューサーとして力を発揮することである。そうすることによって地域の厚い信頼を得ることができ、リーダーやインストラクターが活躍できる場を創出していくのだ。

- ⑦ インタープリター・コーディネーターは、エコツアープロデューサーとしての力を発揮し、地域貢献ができていないと、リーダーやインストラクターの活躍する場を創出できない。

余談ではあるが、最近、当会が取り組んでいる事業に2013年から始まる農山漁村交流プロジェクトの指導者を育成するという事業がある。農山漁村交流プロジェクトとは、自然豊かな農山漁村に小学生を一週間近く滞在させ、学ぶ意欲や自立心、思いやりの心、規範意識などを育み、「生きる力」のある青少年に育成しようとするもので、私たちはその体験指導者を養成している。それは、この事業に賛同しているからに他ならないが、現実として当地の学校関係者や青少年指導に関わっている方々の皆様には、あまり受け入れられていない状況にある。理由は、国が考えている青少年の事情と当地における青少年の実態にはあまりにも温度差があるからである。少なくとも当地の教育関係者及び地域住民たちは、孀恋の子供たちに自然体験活動が足りていないとは考えていない。首都圏の子供たちが自然体験に枯渇しているのは解る気がするが、それを何とかするために作った首都圏ルールを、無理やり農山村に押し付けられて困っているのが実態である。

しかし、そこに私たちがインタープリター・コーディネーター及びエコツアープロデューサーの立場から推進しサポートをし続けていけば、必ず当地にもこのプロジェクトが受け入れられる日が来ることであろう。私たちが自然体験活動を仲介して孀恋と深くつながりを持てたのと同じように、孀恋の子供たちは自然体験活動を通して別の地域で、別の地域の風を受け、別の地域の宝に触れ、別の地域の人とぬくもりに触れるのだろう。そして、自分たちの生まれ育った故郷に帰り、改めて郷土の地域らしさ、地域の良さを思い知るのである。さらに私たちと一緒に“地域の宝探し”をしてくれれば、望外の喜びとするところである。

当会、そして当地域において自然体験活動の企画と運営をしていくにあたって、これまでに書き出した7つのポイントに留意して、ゆっくりと、しかし確実に進めて参る所存です。

※ 2013年3月19日、当会発足時から私を応援し支え続けてくださった土田武司理事がスキー事故のため死亡しました。会のデジタル化とシステム化を急ぐために年長者たちと軋轢を起こしがちな私に、幾度となく「仲良くしろ」と注意してくださっていました。今回の提出レポートのまとめを地域連携で落とし込むことになったのは、天国にいる土田さんのお力が働いたのでしょうか。このレポートを、亡き友人、土田武司さんに捧げます。

提出レポートの終わり方としては甚だなっておりますが、以上をもって「自然体験活動の企画と運営にあたって」のレポートを終わります。

以上

2010年4月16日 木村道紘